

C



円覚 337号(春ひがん号) 令和4年3月1日
編集発行 円覚寺派宗務本所
〒247-0062 鎌倉市山ノ内 409
TEL : 0467-22-0478
FAX : 0467-23-3027

円覚寺ホームページ



<https://www.engakuji.or.jp/>



円覚337号 目次

横田管長のお話	
観音さま 禅宗と『観音経』	1
管長のページ	8
信心ことはじめ③⑥	10
鈴木大拙の言葉と生涯(六) / 蓮沼 直應	12
身体の声 / 桜井 竜生	16
円覚寺の至宝②	20
精進料理レシピ / 藤川 譲治	22

表紙・裏表紙写真 / 円覚寺派宗務本所

横田管長のお話

観音さま

禅宗と『観音経』

修行道場では、毎朝『観音経』を読んでいます。日中にも読みますし、夕暮れにも読んでいます。それに就寝の時にも『観音経』を読むのであります。

それほどまでに『観音経』を読んでいるのです。また一般のお寺で行う法事にしても、『観音経』を読むことが多いのであります。

なぜ『観音経』を読むようになったのか、鎌倉時代から室町時代にかけて活躍した禅僧夢窓国師が興味深いことを書かれています。

『夢中問答』にある話です。

もともと禅が興った中国の唐の時代には、禅僧は、毎朝お粥をいただいて大悲呪という短いお経を唱えるのみで専ら坐禅の修行をしていたのでした。

鎌倉に禅が伝わって建長寺ができた初めの頃には、日中にお経をあげてのお勤めはなかったのです。それが、蒙古が襲来した時、天下の大事の御祈祷のために、日中に『観音経』を読むようになったのでした。それが、そ





円覚寺選仏場の観世音菩薩

のまま慣習になっているというのです。

その頃に建長寺に住していたのが、後に円覚寺を開山される仏光国師(無学祖元)でありますから、恐らく仏光国師が、『観音経』を読むようになさったのだと思われます。

仏光国師はお生まれになる時に、お母さまが夢を見て、白衣の女性がお腹を指して「よい子が生まれよう」と言った、と『佛光録』に伝えられています。後に白隠禅師が、仏光国師はお生まれになる時に、「観音さま」がお母さまの腹を指して「よい子が生まれよう」と言ったと『荊叢毒藥』に書かれていますので、観音さまとご縁が深かったのであります。

元の大軍が襲ってくるという時に、『観音経』を読んだのは、やはり一心に観音さまを念じて、この苦難を救ってくださいと祈ったのでありましょう。

一心に祈る心

『観音経』には、人々が諸々の苦悩を受けた時に、観音さまの名を聞いて一心にその名前を称え、観音さまがその声を聞いて即時に救ってくださいということが書いてあるのであります。

私は小学生の頃から坐禅を始め、中学生の頃には、『観音経』の解説書なども読んで学んでいましたが、はじめの頃はなぜ坐禅をするのに、このような現世利益のお経を読むのか理解できませんでした。

しかしながら、だんだんとこの一心に祈ることの尊さを感じるようになってきました。生まれ故郷の熊野には那智山があります。那智山は観音信仰の霊場で、折に触れて那智の



観音さまにお参りしてきました。大学を卒業して京都の建仁寺に修行に参りましたが、無事に修行できますようにと、清水の観音さまにお祈りしたものであります。

人間はこれからどうなるか分からない不安な時には、一心に手を合わせて祈ることによって、心が穏やかになるものです。一心に祈っていると、観音さまが見守ってくださいているのだという、安心が得られます。

そんなことを最も痛感させられたのが、東日本大震災の時でした。人間の力のとても及ばない状況になると、祈るしかないのです。そして、その祈ることによって、生きてゆく力を得ることが出来ます。みんなで共に祈ることによって、更に大きな力を得ることが出来るのであります。

なにも震災のような特別な時ばかりでな

く、人知の及ばないことはたくさんございます。病気なども、今日の医学の進歩によって、原因や治療法がかなり分かってきてはいるものの、まだまだ説明されないことも多いので、人はやはり祈るものです。出産などもそうでしょう。どうか無事に生まれますようにと、今の時代にも一心に祈るのであります。

かつて奈良の時代に、天然痘がはった時に聖武天皇は大仏の建立を発願されました。あの時代には、すべては分からない中、人々が次々と亡くなっていったのですから、一心に祈るしかなかったのでしょう。みんなで力を合わせて大仏をつくり、心をひとつにして祈ることで、困難な状況を克服していったのです。江戸時代には白隠禅師が、『延命十句観音経』という短いお経を誦誦することを大いに勧められました。これも同じ心であります。

今回の新型コロナウイルス感染症にしても同じことであります。原因や予防法、治療法などかなり分かってきていますが、すべてが明らかになったわけではありません。そんな時、祈る心は人の心を和らげてくれるのです。

もしも何も祈るものがなかったならば、人はもっと取り乱してしまうのではないかと想像します。

観音さまになる

観音さまには、「観世音菩薩」という場合と「観自在菩薩」という場合とがございます。鳩摩羅什は「観世音菩薩」と訳し、玄奘三蔵は、「観自在菩薩」と訳しました。原語は同じなのです。共に「観ること」が関わります。

人々の苦しみの声を観るのであります。そしてその観ることが自在なのであります。思えば仏教は、そもそもお釈迦さまが悟りを開かれて、はじめは説法をためらわれていたところ、梵天の勧請^{かんじよう}によって説法を決意されたことから始まります。

その時に、お釈迦さまは「梵天王の勧請を知りて、衆生に対する哀憐の心を生じ、覺者の眼をもつて、世間を眺めたもうた。そこには、塵垢^{じんく}おおい者もあり、塵垢すくない者もあった」(増谷文雄『阿含經典による仏教の根本聖典』大蔵出版)とありますように、慈悲の眼でこの世界に生きる人を御覧になったのでした。

この慈悲のまなざしを更に具現化させたのが観音さまであると言えましよう。

私たちは、観音さまの慈悲のまなざしに見

禅宗で『観音経』を読むのは、観音さまに救いを頼むことだけではありません。釈宗演^{しやくそうえん}老師が『観音経講話』の中で、「私自身が觀世音菩薩の現われである」と明言されています。それはなにも釈宗演老師のような特別な方だけのことでなく、宗演老師は、「どうしても我々は觀世音菩薩の現われであると、明らかに云い得ると思う」と仰っています。

観音さまとは、大いなる慈悲の心を表しています。その慈悲の心を私たちは皆生まれながらにもっているということなのです。

禅の修行というのは、この本来具えている観音さまの慈悲の心に目覚めて、観音さまのような慈悲の人間になることを目指すのであります。

辛い思いをしたり、悲しい目に遭ったりすると一心に手を合わせてお祈りします。自



守られているのであります。どんなに辛い時にも、悲しい涙を流している時でも。観音さまは私たちをじっと見守ってくださいています。そのように思えば、どんな苦勞も堪えてゆくことができます。

らの弱さを痛感します。そんな弱さを知ればこそ、今度は人の弱さも分かるようになります。

苦しんでいる方の思いを察することができようになり、慈悲の心を起こすことができます。特別なことでなくても、まずは人の話をしっかりと聞いてあげることです。

親身になって人の話を聞いてあげようとする時、その人にはもって生まれた観音さまの心が現れているのであります。そんな時にその人は観音さまだと言えます。

観音さまに手を合わせることによって、本来もって生まれた慈悲の心に目覚めるのです。『観音経』を読むのも、慈悲の心に目覚めるためです。『延命十句観音経』を読むのも同じことです。お互い慈悲の心に目覚めて観音さまのようになるよう勤めましよう。